

福山の景観計画について－都市史の視点から－

西川 龍也

要旨

福山城築城と城下町の開発に際して、城主水野勝成は明確な景観計画に基づき建設に取り組んだ。しかし、技術的な問題への対応と市街地の発展により、当初の景観計画に蹉跌が生じた。

明治期に至り福山市街地の近代化が進められると、福山城の水系空間は埋め立てられ、勝成の景観計画も喪失した。

大正・昭和期に福山出身の建築家武田五一は、公会堂・議事堂・市庁舎の設計に際し、新たな景観計画の創出に取り組んだが、これも福山空襲と天守の喪失という蹉跌に直面する。

戦後復興計画による駅前通り整備は、福山駅とその背景の福山城という新たな顔を創り出すが、新幹線高架の建設によりその景観も大きく毀損した。

現在、福山城に対する景観施策として周辺建物の高さ制限が導入されたが、その効果は疑わしい。福山城を市街地景観の中軸に据えるためには、より効果的かつ総合的な景観施策が求められる。

キーワード：福山、城下町、水野勝成、武田五一、都市景観、高さ制限

1. はじめに

福山市は、都市規模や経済力、交通の利便性に比べ、一般に知名度が低いとされる。特に近隣の倉敷市や尾道市と比較するとき、「福山の街」には、明確なイメージを呼び起こす「都市の顔」であるユニークかつ魅力的都市景観が存在しないからであると考えられる。

しかし、歴史的な視点で見ると、福山は「顔のない街」ではなく、水野勝成、武田五一という先人の手により、明確な景観計画のもとに創られ、あるいは改修された街であった。

一方、こうした市街地景観計画が様々な理由により蹉跌に直面し、失われていったのも事実である。

本論ではこうした福山での景観計画と蹉跌、喪失について歴史的視点から紹介・考察をすすめるとともに、今後に向けたあらたな「福山の顔」についても、

考察、提言を行う。

2. 水野勝成と福山城築城

永禄7年(1564)三河国(愛知県)生まれる。通称は幼名国松、藤十郎、のち六左衛門。父は忠重、母は都筑吉豊の娘である。

三河刈谷城主水野忠重の嫡男に生まれた勝成は、三河以来の譜代家臣の家柄であるとともに徳川家康の従兄であり、徳川家一門に準ずる立場であった。

幼少より従兄である徳川家康に仕え、多くの功をあげたが、父と不和となり、各地を流浪する。豊臣秀吉の死後、家康の仲裁により和解。慶長5(1600)年父の遺領三河国刈谷3万石を継ぐ。

元和1(1615)年の大坂の陣での戦功を認められ、大和国郡山6万石に転じた。

元和5年(1619)、安芸・備後国主の福島正則が

広島城の無断改築を咎められて所領を没収され、幕府は、安芸に浅野長辰が、備後には、大和郡山城主水野勝成が10万石で封じられた。

幕府は、備前岡山の池田、安芸広島の浅野、長州萩の毛利という西国外様大名への監視と牽制のため、徳川一門とも言える勝成を備後に配置したと考えられる。

なお、歴戦の勇士で、「鬼日向」と恐れられた勝成は、島原の乱（1637）にも出兵し原城の落城にも寄与した。その後、寛永16（1639）年に隠居し、慶安4年（1651）に逝去した。

福山は、水野勝成の備後入国に際して、元和5年（1619）に新たに築かれた城下町である。

勝成は当初、山陽道への押さえとなる神辺城に入城し、子息勝俊を瀬戸内の海路の要衝である鞆城に置いた。しかし、神辺の地は山間であり城も山城で広い敷地が得られず城下町の発展が見込めなかった。

そのため、勝成は、新城建設の候補地として桜山（新市）、箕島（当時は自立した島）、常興寺山（芦田川河口）の三案を検討し、陸路・水路の結節点上に立地し、常興寺山に築城を決定した。

芦田川デルタが城下町の発展に必要な平地を有することもまた、選定の理由と考えられる。



図（1）

近世城下町の多くでは、その前身となる自然発生的な集落を取り込んだかたちでまちづくりが行われている。岡山や姫路でも古城が城下に組み込まれているし、鞆や三原、下津井では中世以前の港町の近くに、近世になって城が建設された。これらに比べ福山の場合では、後の市街地あたりの部分の多くが埋め立て、干拓により形成されたため、地形の制約以外は、全く自由に縄張りを進めることができた。

3. 水野勝成による福山城下町建設の当初目標

当時の状況とその後の福山城下町や松江等の同時期に建設された他の城下町の空間構成を考察すると、城下町建設の当初目標勝成は以下の3点を目標とし、計画を進めたと考えられる。

ア. 防衛計画

国外様大名の上洛、関東侵攻を阻止するための城塞機能をもつこと。

イ. 交通計画

陸上及び舟運の交通の便を図り城下町の経済的基盤を確立すること。

ウ. 景観計画

西国外様大名や城下町に出入りする人々に対して、親藩に準ずる譜代大名としての威光を示すこと。また、城下町の繁栄・富貴を住民及び出入りする人々に対して、誇示すること。

4. 具体的な福山城下町整備計画

具体的な勝成の「整備計画」は、彼が城郭及城下町の基本計画図として作成したと考えられる『福山城博物館所蔵備後国福山城写図』（以下『備後国福山城写図』）に見ることができる。注（1）、図（1）

上記の目的を具体化するために、勝成は本丸を取り巻くかたちで内堀を、前面及び側面に外堀を設けた。

また福山市史によれば、築城時に常興寺山が北の永徳山に連なっていて、現在の吉津川を城下町の建設時に開削されたという。勝成は城郭背面に現在の

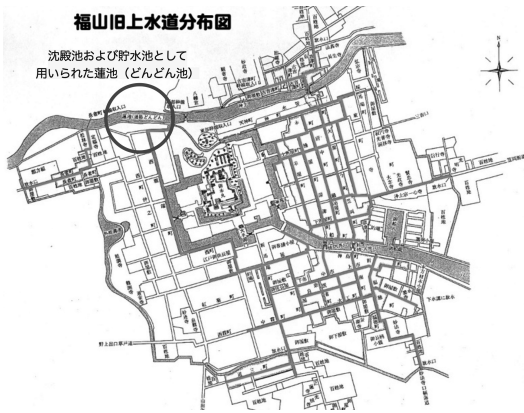


図 (2)

吉津川を芦田川本流とし搦手の総構えとすることで、十分な防備を確保した縄張りを目差したのである。

また交通面では、輶と神辺を結ぶ街道を城下と結ぶこととし、また外堀から東南方向に瀬戸内海と通じる入川を設け、城郭及び城下町への舟運を確保した。

城下町は、城郭を中心に、概ね格子状の街割をなしている。神辺・山陽道に繋がる南北の通りと輶・西廻り航路に繋がる霞町通りを結ぶことで、人の往来を確保し、町の繁栄が図られた。

また城から東南に延びる入り河はこれらの町人地の物流をささえ、その南北の浜通も町人地として繁

榮してゆく。

さらに景観面では、入川に架けられた一つの橋から、高石垣のうえの天守や櫓が建ち並ぶ本丸正面を見通すという「市街地景観」を演出し、武威と富貴を内外に誇示しようとした。

なお、江戸期においては、まちづくりに際して、こうした市街地景観に対する配慮がなされることは一般的であり、たとえば、「大川からの江戸の町並み」、「大阪の高麗橋からのお城天守」、近くでは「海上から眺めた尾道の住吉浜」等数多くの事例を掲げることができる。

5. 吉津川・神田川開削事業と上水道整備

福山城の築城は徳川幕府の全面的な支援の下で行われたため、城郭の建築や城下町の縄張りに関しても、往事の最新の技法が用いられたと考える。が、もしそうであれば、北の総構えの防備や水道敷設のために江戸城の駿河台での開削事業と軌を一にするものである

徳川家康は、1600年頃の江戸の都市建設のために井之頭池から引いた神田上水をはじめ、その後、玉川上水、千川上水などが江戸の町に引かれていった(後に青山・亀有(本所)・三田の3つを加えて「六

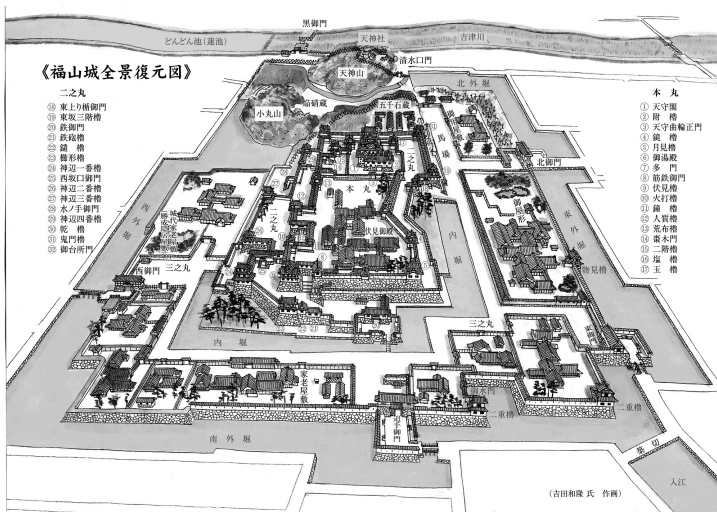


図 (3)



図 (4)

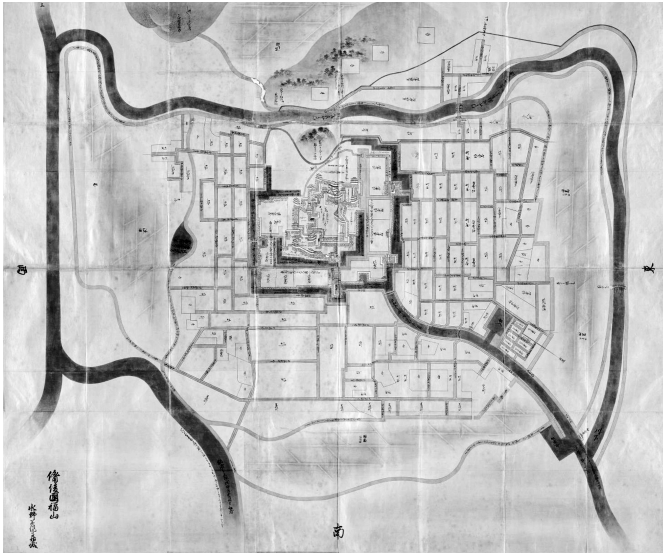


図 (5)



図 (6)

上水」と称した)。

浄水施設や各戸給水がないという問題点があったものの、当時世界でもっとも進んだ設備を有していた。

水野勝成も福山城内町の建設に際しては、も芦田川を水源とする上水道が整備された。福山城北側の「どんどん池」はその遺構の一つである。図 (2)

城郭の建築や城内町の縄張りに関しても、江戸城下町の整備同様に当時の最新技法が用いられたと考えられる。

6. 城郭の建設

福山城の建設にあたり、城主水野勝成は、常興寺山（高さ約20メートル）を平らにしその周囲を高石垣で固めて本丸とした。さらに本丸の四方に、本丸より一段下げて二の丸を一重または二重配置し、北側の一部を除いてその周囲を高石垣で固めた。

二の丸の南半分のコの字型の水堀を造り内堀とし、さらにその周囲の平地に三之丸を設け、東、南、西の三方には水堀を造り外堀とした。

こうした縄張りを「輪郭式平山城」という。

本丸東北隅寄りに天守を置き、その他本丸・二の丸にあわせて22棟の櫓を設けた。図 (3)

二層の付け櫓を持つ天守は、当時最新式の規則的に下から上へ柱間が減じて行く構造（層塔式）の五層六階建てで、外観は破風を整然と配置し壁面や軒下は全て白壁で仕上げられた。図 (4)

また、最上階には廻縁や装飾華頭窓が設けられ城主が眺望を楽しむのにふさわしい華やかな意匠となっていた。しかし、廻縁が風雨に晒され痛むのを防ぐためか、後にその周囲に板戸が巡らされてしまった。

天守への整然と構造計画や外観の意匠も、江戸城を始めとする徳川家の居城の建築に関わってきた技術者の関与が伺われる。

福山城天守の北面は鉄板張りとなっていたが、福山城以外では天守の外壁に金属を用いた例は、寛永15年（1638）三代将軍家光が建て直した、江戸城天守における黒塗り銅板張りの事例だけである。

現存する伏見櫓（国重要文化財）や、本丸中央部に築かれた城主の居館（本丸御殿）に組み込まれていた『伏見御殿』などの建物が、幕府から下げ渡され伏見城から移築したと伝えられる。注 (2)

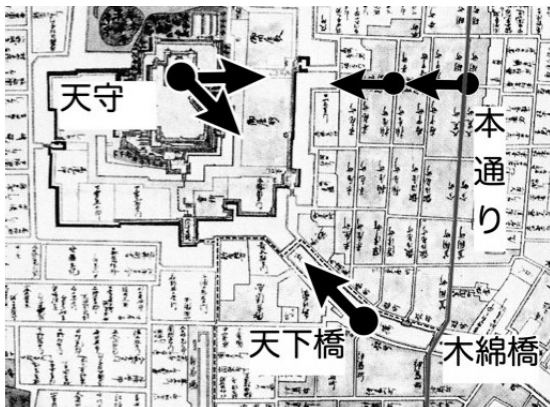


図 (7)

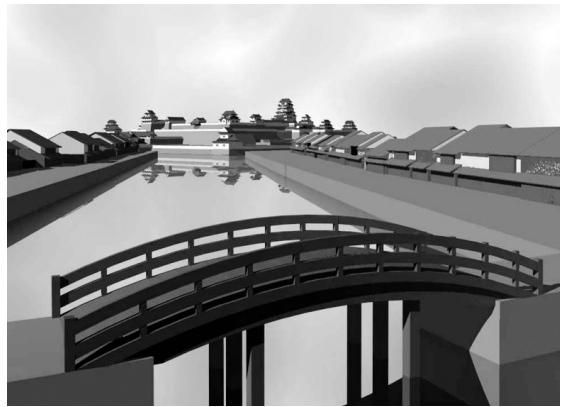


図 (9)

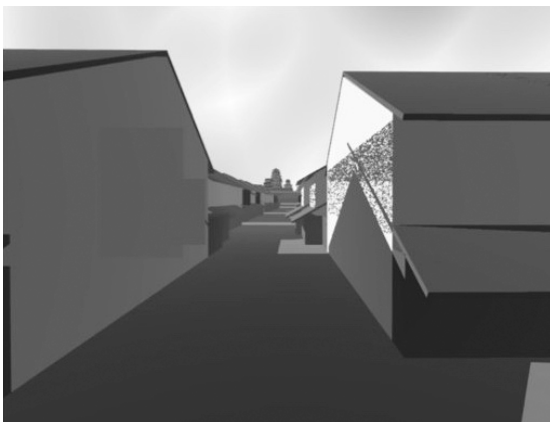


図 (8)

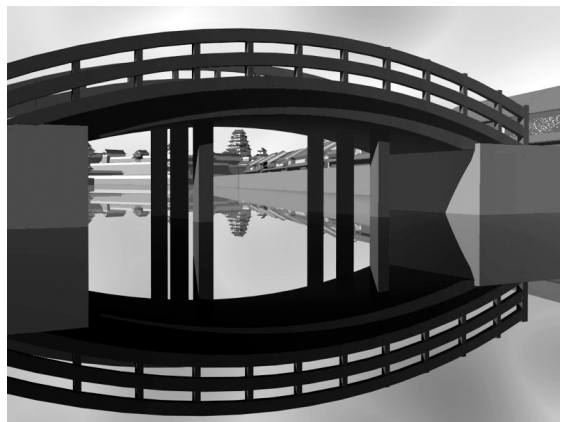


図 (10)

7. 実現した福山城下町の計画とその蹉跌

最終的にした完成した城下町の計画は、実際の城下町最古の図で正保年間（1644～48年）に幕府に提出された『国立公文書館所蔵正保城絵図』（以下『正保絵図』）に見ることができる。図（5）

この『正保絵図』と『備後国福山城写図』とを比較することで、勝成の城下町基本計画の内実現できたものとできなかったものとの対比をあきらかにできる。

ア. 福山城下町整備計画の蹉跌 その1 防衛面
福山城の総構えは、元和6年（1619）の水害に際し

て、城下町建設の頓挫と再検討がなされた。

城下町の水害から城の搦め手に芦田川本流を流すことを止めたと考えられ、以後吉津川には十分な水量が供給されず、総構えとしての機能は低下した。

また、『備後国福山城写図』と『正保城絵図』を比較すると、内堀のうち北半分の整備を諦めている。これは堀の造成のうち、高価な切り土が必要な部分を放棄し、軟弱な堆積土の整地ですむ部分のみとしたからだと考えられる。図（1, 3, 6）

最終的に『正保城絵図』からみると西が芦田川（とその分流）、北と東が吉津川、南側が道三川として完成したが、結果として城郭の搦め手が防衛上の弱点となった。

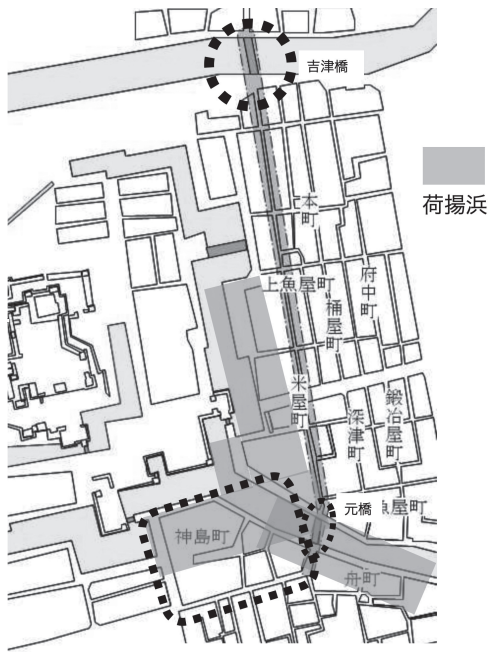


図 (11)

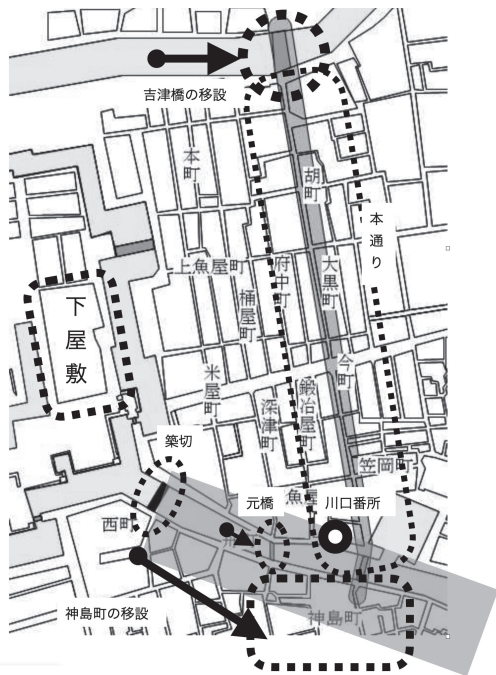


図 (12)

天守北側の壁面が、四層まで総鉄板とされ黒く仕上げられたこともこのことを裏付ける。図 (6)

イ. 福山城下町整備計画の蹉跌 その2 築切

1622年築城当初の福山城は、瀬戸内海と外堀が入川で結ばれ、海から船で城内に入出りできる「海城」だったとされる。

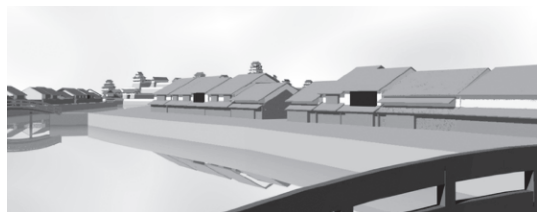


図 (14)

天下橋からは本丸正面全体を見通すことができる

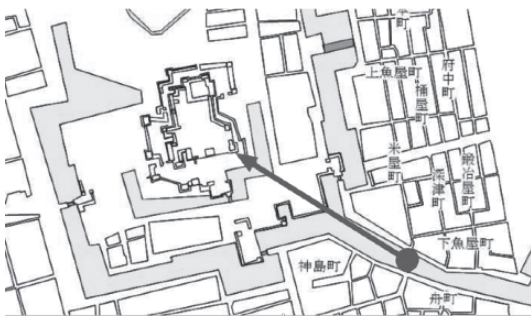


図 (13)

新橋からは本丸正面全体を見通すことができない。
「武威と富貴の誇示」という効果が弱められた。

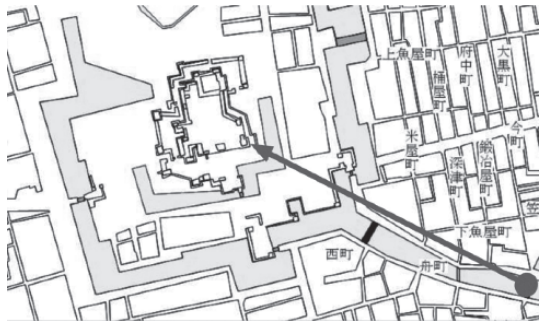


図 (15)

昭和5年 (1930)

城の東側と山陽本線南側の外堀の大半が埋め立てられている。
 東外堀は大正13年 (1924) に埋め立てられた。
 最後まで残った北西外堀は昭和10年 (1935年) に福山女学校
 (現：葦陽高校) の運動場として埋め立てられた。

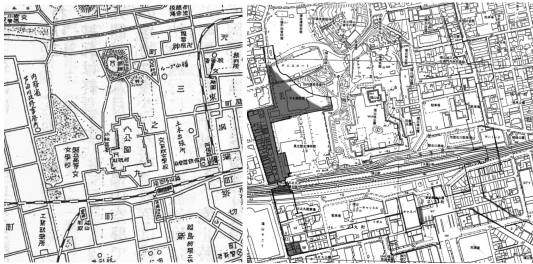


図 (20)

ただ、当時、一帯は干満の差が大きく、干潮時は堀の水が干上がって防衛上の弱点となるため、福山藩は堀の水位を一定に保つことを優先し、入川と堀を分断する土手を築いた。これが築切で、『正保城絵図』に既に記載があることから、築城二十数年後には完成していたとみられる。

なぜこのように防衛上も景観上も問題を来すような計画上の不備が見過ごされたのか。

先に述べたように、福山城及び城下町の建設は幕府の全面的な行われたものであり、そのため吉津川開削や内堀・外堀・入川の造成といった水系整備に関わる土木事業もまた、江戸城等の水系整備を実施した技術者が計画を主導したからであろう。

幕府により派遣された技術者達は、江戸での経験

大正3年 (1914)

両備鉄道 (現在の福塩線の前身) の敷設と駅の建設により、城東側の堀の一部が埋め立てられる。

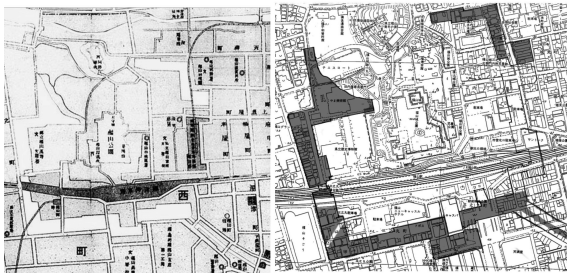


図 (21)

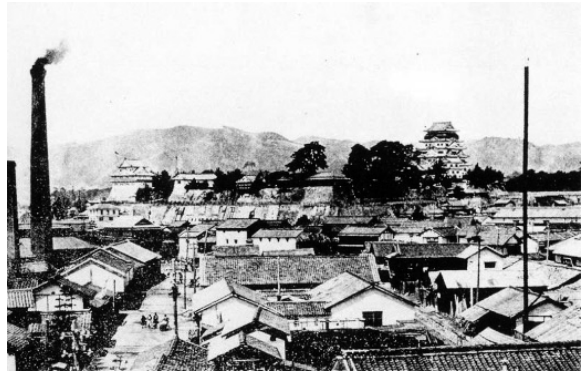


図 (22)

にもとづき約3mの石垣を造成したが、瀬戸内の干満差ははるかにそれを超えていたのであろう。

実際入川は、干潮時には船の出入りが困難になってしまうほど干上がってしまった。注 (3)

ウ. 福山城下町整備計画の蹉跎その3 景観計画

実際の城下町建設にあたり、勝成は山陽道に接する旧城神辺と潮待ち港である外港鞆を結ぶ街道や瀬戸内海と城下を結ぶ入川の動線上のシーケンス上に「福山城の威容が印象的に望める市街地景観」を演出した。

・神辺と鞆を結ぶ街道の沿道となる町人地の一点から5層の福山城天守を正面に見通す。図 (7, 8)

それぞれの町人地は、道沿いに店を持つ町家が左

昭和5年 (1930)

城の東側と山陽本線南側の外堀の大半が埋め立てられている。
 東外堀は大正13年 (1924) に埋め立てられた。
 最後まで残った北西外堀は昭和10年 (1935年) に福山女学校
 (現：葦陽高校) の運動場として埋め立てられた。

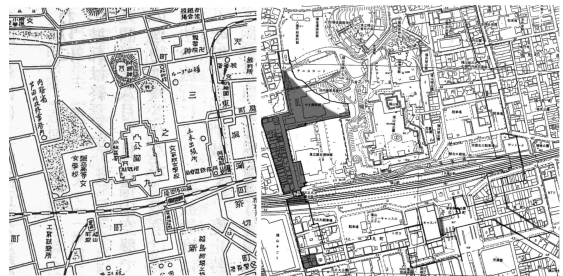


図 (23)



図 (24)

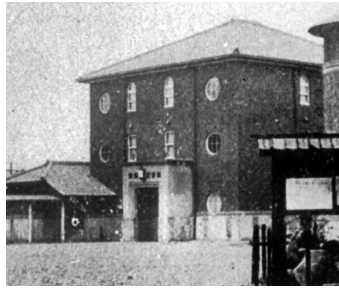


図 (25)



図 (26)

右に並ぶ「両側町」となっていた。

天守の視線が開ける東西街路周辺は、現在では城見町と名付けられ、今も市街地から天守を眺望する重要な場所である。(当時は上魚屋町など)

特に神辺と鞆へ繋がる街路(本町-桶屋町-上魚屋町-深津町から霞町)が入川と交差する点に架けられた「一つの橋(元橋・天下橋)」から、福山城の高石垣のうゑに5層の天守や2層・3層の櫓が建ち並ぶ本丸正面を見通すことができ、まさに「城下町福山の顔」というに値する空間となった。図(9,10,)

しかし、築切の構築により、入川から城下町への荷揚浜のうち、外堀に面した部分が使用不能となった。

そのため、従来町人地の中軸として位置づけられていた本-上魚屋町-米屋町及び大手門前の旧神島町が荷揚浜を利用できなくなった。図(11)

これに対処するため、築切から下流の入川沿いの荷揚浜が活用できるよう神島町が入川南に移転し、町人地が東に拡張された。図(12)

最終的に福山城下の町人町は入川に懸かる2つの橋に面する南北に走る筋とその間の筋に沿って27町設けられ、その周囲を武家屋敷地が取り囲んでいた。

結果、当初の本町-桶屋町-上魚屋町-深津町-天下橋に代わり、胡町-大国町-今町-木綿橋-「新」神島町が新たな町人町の中軸(本通り)となった。

新たな町人の中軸(神辺と鞆を結ぶ街道)と入川との交差点にあたる木綿橋から福山城と本丸方面を眺めてみると、城と橋との間の街並みの屋根が邪魔となり、天守をはじめとする城郭の全貌を見通すことが不可能になった。図(13, 14, 15)

その結果、「海と城下を結ぶ入川の動線上のシーク

エンス上」に福山城の威容が印象的に望める市街地景観を演出し「武威と富貴を内外に誇示」しようとした景観計画は後退することとなった。注(4)

8. 明治維新と堀の消失

明治維新を迎えた際、県庁、軍、高等教育機関が設置されず、機能を失った城郭及び武家屋敷地が空洞化し、帰農した藩士の殖産のための農地にされた。

しかし、明治24年(1891)に山陽鐵道が外堀の内側の三の丸に敷設され、さらに駅と入り川が接する現在の駅正面付近には、明治26年(1893)に福山紡績の工場が開設されている。図(20)

福島紡績に続き、明治36年田中八九郎が西町に福山製紙所を創業した。

明治41年には陸軍歩兵第41連隊を誘致した。

福山紡績から排出された石炭殻により、入り河は徐々に埋め立てられ、跡地は民地へと転用されていった。城から天下橋からの景観は失われ、大正までには、天下橋そのもの消失した。図(21)

大正2年(1913)に鞆鐵道、その翌年には、両備鐵道(現JR福塩線)が敷設され、福山駅は鞆・府中からの人の交流や物流の中継点となり、駅前に旅館・食堂等や繊維産業関連の間屋が立地するようになる。なお、両備鐵道の敷設に際しては、福山城の東外堀が埋められ、その敷地に供された。図(22)

大正5年(1916)には人口3万人を超え、市制を施行した。大正15年(1926)から昭和4年(1929)にかけて実施された、東桜町の高等小学校跡地での公会堂、市庁舎に併せて、市庁舎東側に駅前通の拡幅

も行われた。

このころより、失われた天下橋に代わり、福山駅が徐々に街の正面として認識されるようになったと考えられる。

しかし、入り川からの城郭正面を意識した景観という視点は、忘れ去られてゆく。町の活力再生とともに、堀や入り川は、不要な空地として、徐々に埋め立てられ宅地等に転用されてゆく。入り川は、最終的に、昭和10年(1935)に国道2号線に至るまで埋め立てられ、跡地は宅地として払い下げられた。図(22)

また、西側にかろうじて残されていた外堀も昭和10年(1935)に福山高等女学校運動場(今日の葦陽高校)拡幅のため埋め立てられ、福山城から堀割はすべて消え去ってしまった。

戦災までに城下町からその姿を消してしまうことになる。注(5)図(23)

9. 武田五一による福山市公会堂・議事堂・市庁舎

武田五一は、明治5年(1872年)福山市西町に、元福山藩権大参事武田直之の長男として生まれた。

東京帝国大学で建築学を習得、卒業後京都高等工芸学校教授を経て、大正8年(1919年)に京大教授となり工学部建築科を創設し、多くの後進を育てた。

また、日本に最初にアールヌーボーを紹介し、旧帝国ホテル設計者として著名なF.L.ライトとも親交を結びんだ。昭和14年(1939)に68歳で逝去するまで、東方文化学院京都研究所(京都大学人文科学研究所)、京都大学本館、同建築教室、京都府立図書館、京都市庁舎など建築家として数多くの作品を設計した。

武田五一の設計により、故郷である福山市で製作・建築された作品として、『福山市公会堂』大正15年(1926)、『福山市庁舎』及び『市会議事堂』昭和5年(1930)など7つの事例が確認されているが、現在では全ての作品が失われている。

- ・福山市公会堂・議事堂・市庁舎建築までの経過
大正5年(1916)福山市発足

大正7年(1918)

庁舎建築積立金設置及び管理規定制定を決定

大正14年(1925)

高等小学校跡地に市庁舎を移転

旧庁舎敷地を売却

大正15年(1926)

阿部家より会堂建設の基金四万円が寄贈

市制10周年記念事業として、市公会堂建設を採決

10月15日『福山市公会堂新築落成祝賀式』開催

昭和3年(1928)9月市庁舎建設の決議

昭和5年(1930)市庁舎完成

昭和5年(1930)12月

陸軍大演習に際し、市庁舎に天皇行幸

公会堂は当時武田が得意としていたスパニッシュスタイルで、正面に双塔を持ち間にバルコニーを取る構成で、ベージュ色の壁体に屋根や軒は朱色のスペイン瓦で葺かれ、端正で華麗な面影である。図(24)

議事堂は左右非対称の正面に丸窓を配置し、寄棟屋根は黒瓦葺というモダンな意匠である。図(25)

寄棟屋根黒瓦葺で控え壁が目立つ市庁舎の外観は素朴で控えめな印象であり、当時の庁舎建築の通例である当局の権威を誇示することを極力排除するようなデザインとなっている。図(26)

同時期、武田は、京都市庁舎の建築にも関与していたが、うるさい人が多い京都に比べ、福山においては、郷土の名士として自由に腕が振るえたであろう。

実際、京都市庁舎の平面計画や空間構成の手法は、典型的な当時の庁舎建築そのものであった。

正面に大きく広場を取り、ファサードは左右両端と中央部をやや付きだした形式で、その中央部に大階段備えた正面玄関を開き、屋上には高塔を掲げている。

平面は中廊下式のE字形で玄関を入ると正面に大階段をおいた中央ホールが広がり、議場はその背後に置かれていた。威風堂々とした重厚な石造風の京都市庁舎の姿は、明治以来の官公庁舎のセオリーどおりに当局の権威・権力を率直に誇示している。

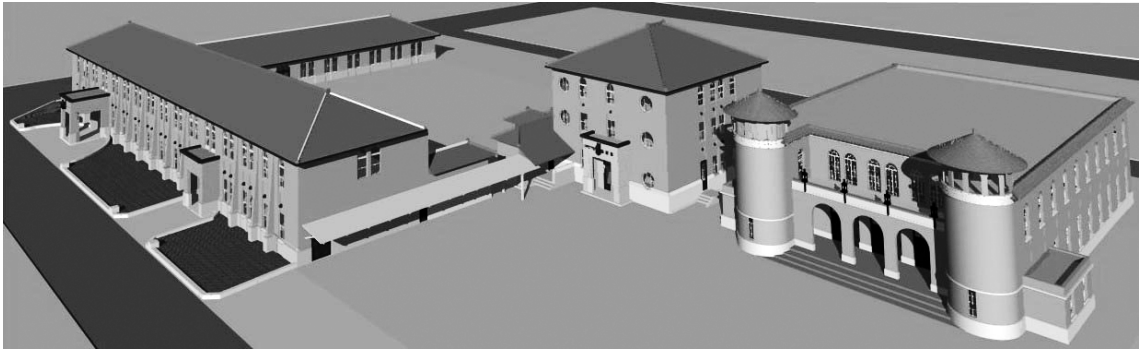


図 (27)

さらに、市公会堂も含めた全体の配置計画を検討してみると、より武田の意図が明らかになる。

残された資料から建設当時の市庁舎、市会議事堂及び公会堂の外観をCGを用いて復元し、当時の景観を再現しようと試みたものである。図 (27)

公会堂と議事堂は街路から距離をとり、広間に面して並び立っている。

一方、市庁舎は街路に対してほとんど引きを取らず、それに沿う形で配置されている公会堂の前面広場の東側を閉じる形となっている。

すなわち、角地に開く広場の中央に華麗な意匠の公会堂を置き、その広場の閉じる形で控えめな意匠の市庁舎、その間を繋ぐように議会棟を置いているのである。市民が集う広間である公会堂を、市民の祝祭の場である広場の中軸に配置し、市民に仕える公僕の事務施設としての市庁舎は、市民の日常生活の場である街路に沿わせる。そして、市民から選ば

れた代表が集う市議会を、2つの建物を結ぶ形で据えている。

こうした空間の構成は、中世ヨーロッパの自治都市の広場の造形、たとえば、ベネチアのサンマルコ広場における大聖堂と総督府との配置あたりに想をえたものであるかもしれない。福山の市庁舎、市会議事堂及び公会堂の配置計画は、リベラリストであった武田が、自己の理想のシビックセンター像を素直に投じたものであった。

また、公会堂・市庁舎の正面に大手門と天守が位置していた。一方武田は、公会堂の屋上に、市民の眺望の場を提供する「露台」として屋上空間を設計していた。

そこで公会堂屋上から玄関正面方向への眺望景観をCG復元してみると、真正面に天守を据えた雄大な景観が広がる。武田は旧福山城への眺望景観を施設配置計画の中軸に据えていたことがわかる。図

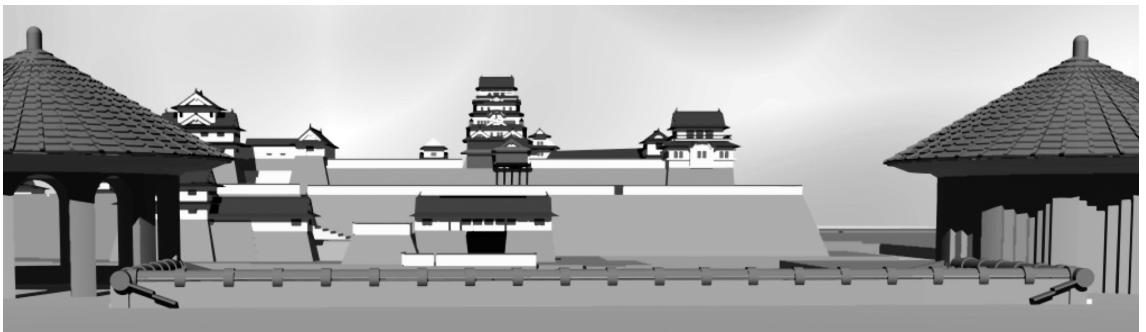


図 (28)



図 (29)

(28)

武田は、福山市公会堂・議事堂・市庁舎の建設を契機に、堀の埋め立てで失われた天下橋からの景観に変わる新たな福山の顔を生み出しそうとしたのではないだろうか。

なお、こうした異なる機能を持った複数の公共施設を、広場と一体のかたちで有機的に関連づけ配置する手法や、広場・施設からランドマークへの眺望を中軸に据えた計画手法は、戦後丹下健三が広島ピースセンター（被爆記念館・公会堂・ホテル）や今治市庁舎（市庁舎・公会堂・市民会館）の設計に導入し世評を高めている。図 (29)

では、実に丹下に数十年先行した武田の福山市公

会堂・議事堂・市庁舎のデザインは当時の市民に理解評価されたのであろうか。

市庁舎の外観については、落成当時の新聞記事に掲載された中野市長の祝辞で、『(略)新市庁舎及公会堂は其の規模宏壮なりと言うべからず絵画の美備われりと誇伝するに足らずと雖もそれが設計は本市出身にして武田博士の手に成り精築悉く最新の様式に則り専ら市民の便利を考慮し執務機能の向上を旨とし採光通風宜しきに適てるを覚う (略)』と紹介され、「威厳や華を備えない意匠」であることを市長にこぼされてはいるが、公会堂前広場を中心に据えた写真は多数残されており、施設計画全般は「福山の新しい顔」として市民には好評であったようだ。

一方福山城への眺望景観については、現在のところ当時の市民が「露台」から福山城を始めとする市街地の眺めを楽しんだという記録を発見することはできていない。恐らく管理上の視点から、通常屋上への出入り口は閉鎖されていたのであろう。

昭和20年（1945）8月8日には、福山の街は空襲を受け、市街地の大半を消失し、公会堂、議事堂は焼け残ったものの市庁舎は焼失してしまった。また眺望の対象となるべき福山城天守も消失している。

戦後一時、市庁舎跡はバラック庁舎となっていたが、昭和35年（1960）に新庁舎が落成すると、旧庁舎は解体され、その跡地に福山センイビルが建設

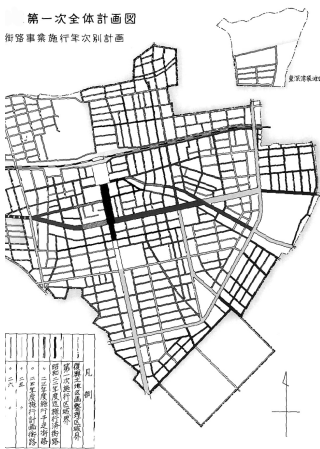


図 (30)

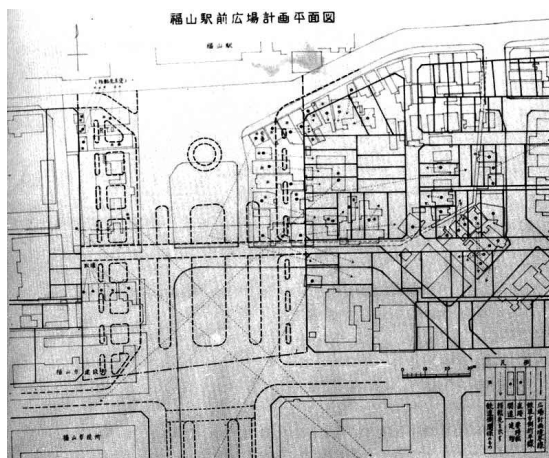


図 (31)

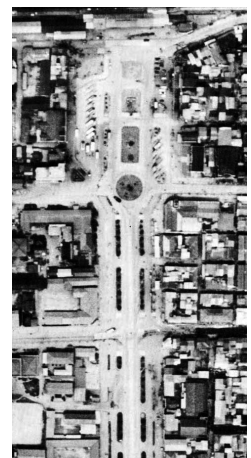


図 (32)



図 (33)



図 (34)

された。また、旧議事堂は公会堂東側に引き家され、中央公民館として再利用されており、武田の市民広場を中軸とした配置計画は毀損された。

昭和41年（1966）に福山城天守閣・月見櫓・湯殿が再建されたが、皮肉なことにほぼ同じ時期に福山市民会館の完成により使命をおえたとして公会堂は取り壊され、その屋上からの福山城への眺望は再評価されることなく消滅した。注（6）

10. 戦災復興と山陽新幹線の建設

戦災を期に、翌年から戦災復興事業として土地区画整理事業に着手した。特に、国道2号線、駅前通

及び野上と三吉を結ぶ外郭線は、広幅員で整備され、これらを軸に、駅前を中心とに中心商業街区の整備誘導が目指された。図（30）

浜通は拡幅をなされたものの、入り川跡は宅地化されたままであり、また、突っ切り周辺では、旧来の城下町の骨格を全く無視して伏見町の町割が実施され、浜通から福山城への視線は遮断された。すでに天下橋から雄大な景観は、市民の記憶から消えていたのであろう。図（31）

一方、駅前通りは、新興福山の景観の主軸として明確に位置づけられ、福山城をアイストップとする駅周辺では、幅100mの交通広場をかたちづくり、名実とも福山の顔となってゆく。図（32）



図 (35)



図 (36)



図 (37)

その結果、金融機関や事務所等が駅前通り、2号線沿道へと移り、昭和40年代は、大規模意匠業施設の進出で、江戸時代以来の伝統を誇る本通り商店街にかわり、名実とも駅前周辺が商業地域としての拠点性を確立してゆく。

この時期に、戦災復興の仕上げとして戦災で消失した福山城天守の復元がなされる。未だ高層の建物が限られていた当時は、復興なった福山城の雄志を広々と拡幅された国道や駅前通から眺めることが可能であり、まさに街のシンボルとしてふさわしい景観を形作っていた。図(33)

しかし、山陽新幹線敷設に伴う連続効果立体化事業が実施され、昭和50年(1975)に完成する。が、市街地の南北を隔てていた国鉄山陽線の高架化は、市街地の南北交通の物理的障害を解消する上で大きな力となったが、他方、市街地全域にわたり高さ16メートルに及ぶ障壁が東西に走ることとなり、景観上に大きな影響を及ぼした。

特に、江戸時代以来福山のシンボルであった福山城天守閣は、戦災からその外観が復興されたにもかかわらず、江戸時代以来の繁華街である本通りや浜通りからも、また新たな商業拠点として整備され発展してゆく駅前地区からもほとんどその姿を見ることができなくなってしまった。図(34)

このことは、高度経済成長化の人口流入や合併による広域化と併せて、福山の「城下町」というイメージを希薄化した。注(7)

11. 城下町福山の市街地景観の現状

福山市の場合、市街地から見た福山城に対する景観保全を考える場合、現状で市街地のすべての場所からの景観確保を考えることはもはや現実的ではない。

また線的な景観保全を考える場合、その検討対象として考えられるのは、二号線、吉津川、芦田川に沿う形での景観確保が考えられるが、これもまた、もはや現実的ではないと考えられる。

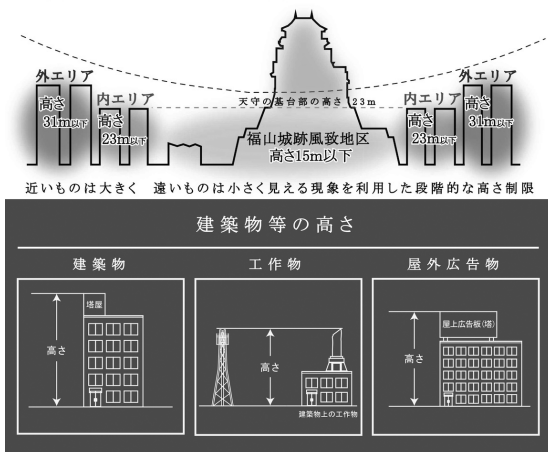
かつて、東南に位置する天下橋から福山城への眺望が、景観計画の主軸となっていたのは、前に述べたところである。では、現在の天下橋からの景観は、どのようになっているのだろうか。

天下橋上の景観と比較するため、現在、福山城方面にもっとも見通しの良い条件を考え、北浜通の入川跡に立地している麻生時計店あたりから眺めた景観を見てみる。図(35)

意外なことに、現在でも伏見町の町並み越しに天守閣を見ることができるのである。しかし、伏見町

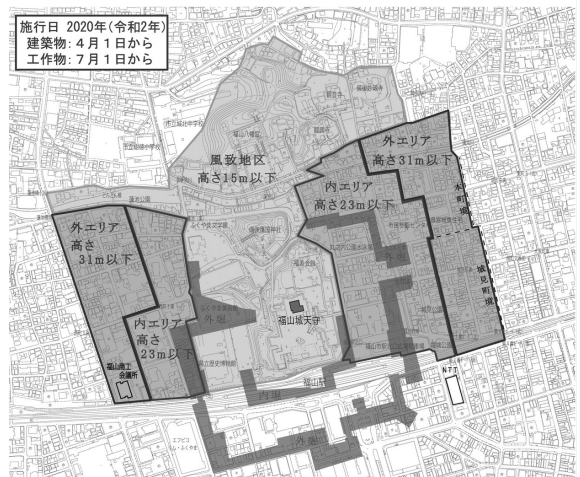
広がる空へ 思いを馳せて・・・

100年後 天守前広場に立って 天守を見上げると そこに青い空が広がるように



図(38)

歴史の意味を 区域に重ねて・・・ 内エリア・外エリアの指定



図(39)

の建物にさえぎられて、天守閣の上層だけがかろうじて見えるだけである。

次に、もう一つの重要なポイントであった天守東側城見町からの景観はどうであろうか。

天下橋よりも近い位置から天守を眺望することができるが、下層部は道路に面した建物にさえぎられている。また遠近法の効果により近づくほど建物にさえぎられる部分が高くなってゆく。図(36)

現在もっともよく五層の天守の全貌をとらえることができる場所は、西側の美術館まえ広場からの参道である。ただし夏期の広場から眺望は、高木の緑葉により大幅にさえぎられてしまう。図(37)

なお、駅前通りからの景観は福山駅高架に大きく疎外されていることは前述のとおりである。注(8)

12. 福山における景観誘導に関する考察

令和2年(2020)に福山城周辺景観地区に建物の高さ制限が施工された。この制度は福山駅以北の福山城に近接するエリアにおいて、建物の高さに23m及び31mの制限を設けることで、福山城周辺の景観を整備するものとしている。図(38, 39)

この新たな制度は、これまで述べてきた「福山の顔」としての福山城への眺望景観を確保・発展への寄与をきたいできるものであろうか。

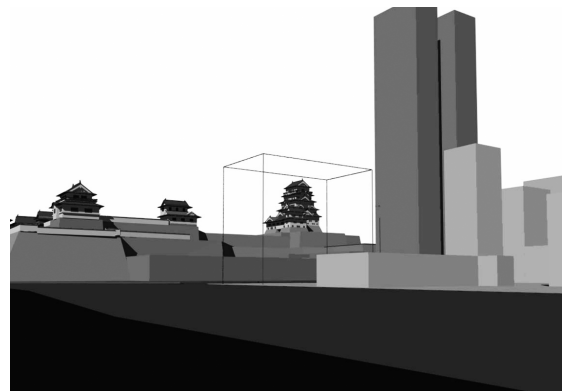
景観を考える際には、パンフレットに記載されて

いるように、建物の本当の大きさではなく、立っているポイントにおいて実際に見える大きさと、そのシルエットの視野における位置が大切なのである。

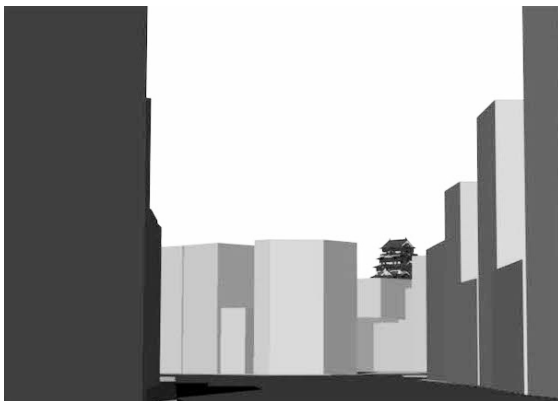
景観指導を考えると、水平方向に連続した形で景観を保全する場合(ある一定の範囲全体で高さによる景観疎外が生じないようにする、ある道、川等に沿って歩む際連続して景観疎外が生じないようにする場合)、言い換えれば、面的なあるいは線的な景観の保全を図る場合には、絶対高さによる制限が有効となる。

また、ある対象の背景によけいな建物が進入しないようにするためには絶対高さによる制限が有効である。

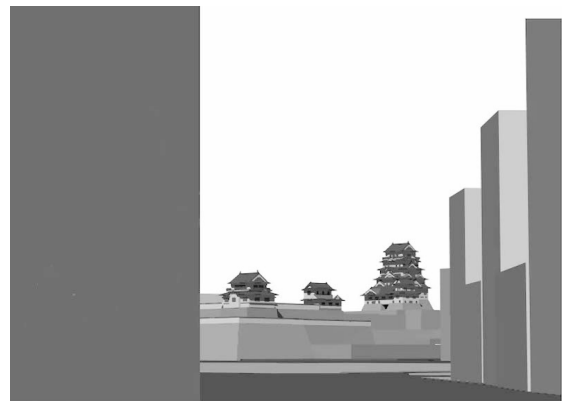
景観法のモデルの一つとなった京都市の景観指導の事例で言うと、前者は鴨川河畔から東山への景観



図(40)



図(41)



図(42)

を確保しようとする場合に必要となった考え方であり、また後者は二条城等文化財の庭園景観を保全する場合に必要な考え方である。

ただし、この場合も視点から近いところは、低くする必要があっても、対象から離れてゆく毎に高さの制限が緩和されることが理解できる。

実際、こうした考え方にに基づき、鴨東地域では原則として20M以下、鴨川河畔ではさらに低くなるよう建物の高さ規制が敷かれている。また、二条城や本願寺等の文化財の周辺も、それを囲むように周辺よりも厳しい絶対高さ規制が敷かれている。

今回の福山城周辺景観地区の高さ制限でも、パンフレットを見る限りでは、周辺からの天守への眺望の確保については考慮されておらず、福山城本丸広場の背景を確保するためとしている。

ただし砂地に礎石が点在するだけの広場、鴨川河川敷や二条城御殿や本願寺の書院前の日本庭園に比べて、その背景を守るべき空間であるかどうかは大いに疑問である。

また天守の石垣を基準とした高さ23m制限であるが、特に建物が近接している東方向の景観では、石垣高さ約15mのポイントから、視点高さ約1.5mや塀(約2m)を考慮しても、約5mの建物が線上に連担することになる。

むしろ背景確保として有効と考えられるのは現在最も天守への眺望が確保されている西側美術館前広場である。現在すでに東側のタワーマンションが天守の右手にそびえているが、今後はこうした事例の発生を防ぐことが可能になる。ただしこの点はパンフレットにも記載されておらず、今回の高さ制限は、福山城への景観対策としての都市計画施策を求められた結果、関東部局がとりあえず他都市(京都市)の事例を参考に、安直な指定に及んだのではないかという疑義すら生じる。

福山市の場合、市街地から見た福山城に対する景観保全を考える場合、現状で市街地のすべての場所からの景観確保を考えることはもはや現実的ではない。また線的な景観保全を考える場合、その検討対象として考えられるのは、二号線、吉津川、芦田川に沿う形での景観確保が考えられるが、これもまた、

もはや現実的ではないと考えられる。

結論として、福山における景観誘導施策として市街地から天守への眺望の確保を目差すには、絶対高さ制限を面的に規制する手法は、あまり意味を持たないとする。

むしろ天守を眺望するための限定的な視点をいくつか選定し、そのポイントから福山城への軸線上のみに厳しい高さ制限を実施するという手法の方が効果的であるとする。

先に述べたように景観を考える際には、遠近法の効果により建物の本当の大きさではなく、立っているポイントにおいて実際に見える大きさと、そのシルエットの視野における位置が大切なのである。

そして、ある場所に立地する比較的狭い範囲の対象の景観を確保する場合には、「高さ」ではなく、「視野の水平の広がり」を考えてゆく方が合理的である。具体的には、視点を頂点とした円弧を描く形での視野の範囲のうちでの、守るべき対象とそれに対する景観阻害要因の各々のシルエットを検討すればよい。

道路の突き当たり立地する建物を対象とする場合を考えると、当然立地しているポイントから建物正面は高さ方向の視野が確保されていなければならないが、その対象の範囲を超えた左右にあっては、絶対的な高さは景観に影響を与えない。

たとえば、駅裏からの景観CGを作成して考えてみると、お城直近に最近建てられた2つの建物のうち、絶対高さが高いマンションではなく、マンションより手前の低いホテルの方が、景観を疎外していることが理解できる。図(40)

では、天守を眺望する視点の立地ポイントを規定する場合、どのような検討が必要になるのであろうか。

まずに必要なとなるのは、守るべき、あるいは育成すべき景観ポイントを定めることであり、これについては広範囲な市民参加による意見の集約が必要となる。

ただし、「駅前通り・駅前広場」並びにシンボルロードとして育成を図ろうとしている「北浜通り」の景観に関しては、概ね異論はないと考えられる。またお城北側では吉津川沿いで幾つかのポイント、東側では「城見町の交差点」、西側では芦田川土手上の幾つ

かのポイントあたりをこれに追加して検討を進めるのが妥当ではないだろうか。

この場合、まず問題となるのは左右のビスタを疎外している建物の取り扱いであるが、面的な開発が進められるのであれば、この場所を空地とする代わりに隣接する敷地の容積を加算する方法を取ればよい。具体的には特定街区あるいは一団地規定の活用が考えられる。またこの空地を公開空地とするならば容積の割り増しも期待できる。図(41, 42)

さらにアメリカで取られているように、離れた敷地に対する空中権の移転といった手法も検討できよう。この場合都市計画変更が必要となるが、実際の都市の活力と容積率の指定がアンバランスとなっている福山にあっては、検討に値する手法ではないだろうか。

最後にそれ自身が線的な存在であるJR高架橋であるが、これが現在の最も重大な景観阻害要因であると共に、福山の活力を支えている大切なインフラであることも事実である。東北新幹線上野駅周辺にみられるように、新幹線の地下化に技術的な問題はない。景観と移設のコストをどう考えてゆくかということが問題である。

しかし、現在、市民意識の中で景観に懸けるコスト意識がわかりつつある。たとえば、東京日本橋上空の首都高速の移設が論議され始めている。JR高架橋に関しては、将来改修を迎えた時期に、地下化、移設を検討してゆくことに期待したい。注(9)

13. まとめ

福山の天下橋からの景観は、都市計画全体と整合性・合目性において、また、なした成果としての景観それ自身も、江戸期城下町における最上の事例であると考えられる。

しかし、それを鑑みるとき、今日その景観の殆どが失われてしまっていること、そして市民がかつてそうした素晴らしい都市的資産が福山に存在していたことを忘却してしまっていることは、まことに残念である。

今日、福山というまちの知名度の低さ、まちづく

りへの市民の参加意識の不足が嘆かれているが、我々が心の中で町の顔となるべきものを見失っていることが、その大きな原因となっているのではないだろうか。

逆に言えば、同様な成り立ち、規模、都市構造を持つ倉敷市と比べてみると、外部からの目、市民意識のあり方の差異を生んでいる理由の一つは、「倉敷川美観地区」という都市の顔を有しているかどうかなのである。

いま直ちに江戸の市街地景観の再生は無理であったにせよ、こうした優れた景観を持っていた歴史への認識を市民が共有し、それを意識に置いた上での将来の町作りを考えてゆくことが、前の嘆きへの解決の糸口を与えてくれると考える。

長崎市では失われた出島の景観を復元することを100年掛けて取り組んでゆくという。100掛けてこわれた景観は、100年掛けて取り戻せばよいのである。

現在は、市民が福山城を中心とした市街地景観のポテンシャルを再確認し、市民意識のシンボルとしての福山城を心に抱けるようにしてゆくことが大切だと考える。

注(1)、注(2)

『備後国福山城写真』及び福山城とその城下町の建設経過についての詳細は『2011年度日本建築学会中国支部研究報告集』掲載の『『備後国福山城写真』と福山城下町 その1 『備後国福山城写真』と福山城下町の縄張り』を参照されたい。

注(3)

築切の建設経過についての詳細は『2017年度日本建築学会中国支部研究報告集』掲載「福山城趾築切遺構について1-成立及び消失」を参照されたい。

注(4)

福山城下町景観計画の概要及びCGを用いた復元的空間検証手法については『福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報第3号』掲載「城下町福山の景観計画について」を、またその蹉跌についての詳細は、『2019年度日本建築学会中国支部研究報告集』掲

載「築切構築による福山城下町の市街地空間の変容について」を参照されたい。

注 (5)

明治以降の水系空間の喪失と市街地景観の変容についての詳細は、『福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報第3号』掲載「近代福山の市街地景観について」を参照されたい。

注 (6)

武田五一設計福山市公会堂・議事堂・市庁舎についての詳細は、日本建築学会中国支部大会学術講演梗概第27号掲載『福山市公会堂，市庁舎及び市議会議事堂に関する研究：その1 福山における武田五一の作品について』『福山市公会堂，市庁舎及び市議会議事堂に関する研究：その2 福山市公会堂について』『福山市公会堂，市庁舎及び市議会議事堂に関する研究：その3 福山市庁舎及び市議会議事堂について』を参照されたい。

注 (7)，注 (8)，注 (8)

福山市街地空間の戦後の変容，現状及びその検証CGを用いた空間検証手法の詳細は、『福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報第3号』掲載「近代福山の市街地景観について」を参照されたい。

参考文献：福山市史中巻及び下巻/1963/福山市史編纂会，福山戦災復興史/1975/福山戦災復興誌編纂委員会編，福山水道史/1968/福山市水道局

図 (1, 4, 6, 20) 福山城博物館所蔵

図 (2) 福山水道史掲載図に西川が加筆作成

図 (3) 福山市教育委員会

図 (5) 国立国会図書館所蔵

図 (7) 福山城博物館所蔵図に西川が加筆作成

図 (24-26) ふくやま美術館所蔵

図 (30) 福山市史下巻掲載図

図 (31, 33, 34) 伏見町歴史浪漫HP掲載，<https://www.tooricho.jp/history/index.htm>

図 (29) 社団法人 公共建築協会

図 (32) 福山戦災復興史掲載図

図 (20, 22-23) 福山城博物館所蔵図に西川が加筆作成

図 (9-15), (27-28), (35-37), (40-42) 西川が作成

Historical Considerations on Urban Landscape Planning in Fukuyama

Tatsuya NISHIKAWA

Abstract

Katsunari Mizuno was the first lord of the Fukuyama domain and developed the castle town of Fukuyama. Fukuyama Castle Town had a clear plan for urban landscape. However, after the Meiji Restoration, the almost town was abandoned. Citizens could preserve only the castle's keep and several buildings. Although reclaimed the castle's waterways and Irikawa Canal to develop modern industry at the time, forgetting the old cityscape. When Goichi Takeda designed a new auditorium, city hall, and council building, he set up a building to form a forum. He sought to create a new façade for the city. And he designed a viewpoint to Fukuyama Castle at the roof top of the auditorium. However, in World War II, the bombed cities lost their keep and city hall. Twenty years later, the local governments rebuilt the keep, but ruined the old auditorium. The citizens have forgotten Takeda's dream. In the city's reconstruction plan, the local government built a large transportation plaza in front of Fukuyama station, and then the castle was visible beyond the station. In the mid-1970s, the high rose viaduct of Shinkansen set between the plaza and castle. So, we lost the façade of Fukuyama again. Last year, local governments introduced new restrictions on buildings built near the castle. But the height regulation to protect the urban landscape of Fukuyama Castle does not seem to work. A more effective and comprehensive new method is needed to set up Fukuyama Castle in the urban landscape of Fukuyama

Keywords : Fukuyama Castle Town, Katsunari Mizuno, Goichi Takeda, urban landscape, height regulation

DOI : 10.15096 / UrbanManagement.1401